様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24　年　5　月　11　日現在

機関番号：34416
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2010～2011
課題番号：22652012
研究課題名（和文）
　セブのサント・ニーニョ―十字路に立つ聖なる子供
研究課題名（英文）
　Santo Niño of Cebu: the Child Jesus Standing at the Crossroads
研究代表者
　蜷川　順子（NINAGAWA　JUNKO）
　関西大学・文学部・教授
　研究者番号：　00268468

研究成果の概要（和文）：フィリピン国セブ市にあるサント・ニーニョ像は、ヨーロッパ南北および洋の東西の文化交流の結節点に位置づけられる。本研究はその実体を解明し、キリスト教における聖母に伴われない単独幼児像登場の、近代における意味の探究を目的とした。西欧内の交流は宮廷間の強い結びつきを背景としていた。また、同彫像が改宗に際して果たした役割は、フィリピンを含むアジア全域に分布する神話世界と関係する可能性があることがわかった。

研究成果の概要（英文）：The Santo Niño of Cebu is a small statue of the Child Jesus that is enthusiastically focused on in its religion. It is believed that the statue had been made in Belgium and brought by Magellan from Spain to Cebu in the 16th century. It could therefore be situated at the cultural crossroads of the interchange between north and south in Europe, as well as that between west and east.
By questioning the reason why Magellan's men brought it with them and the role that it played when a couple of local chieftains converted to Christianity, we researched the meaning of the appearance of the single statue of the Child Jesus, who was not accompanied by his mother, in the early modern age.
The reason why Magellan's men brought it with them could be explained by the strong connection between the courts of Belgium and Spain and their political and missionary strategies. The role that it played in the conversion of the local chieftains seems to have been related to Asian mythology pervading the whole southeast region, including the Philippines.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	900,000	0	900,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
総　計	1,400,000	150,000	1,550,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・　美学・美術史
キーワード：子供神、セブのサント・ニーニョ、 マゼラン、 単独の幼児イエス像、 東西交流

１．研究開始当初の背景
(1)研究の動機
①2007 年度 JFE２１世紀財団助成研究「環インド洋文化圏における文化変容とその意義」（研究代表者：関西大学新谷英治）の共同研究者として、植民地バロックと呼ばれるフィリピンの聖堂建築の調査をおこなった。2009 年に報告書を執筆する段階で、セブのサント・ニーニョ聖堂にある彫像が、フランドル産でありながらマゼランを初めとするスペインで受容されていたヨーロッパ南北の文化交流の問題と、その彫像がアジアで新しい信仰を生んだ東西の文化交流の問題との結節点に位置づけられるという、文化交流や文化変容の重要性に気付いた。
②申請者は、2003 年１月に福岡アジア美術館で開催された『フィリピンの聖なる像サント』展に触発されて、著書『図解雑学　美術でたとる世界の歴史』(ナツメ社、2004 年)において、セブのサント・ニーニョに触れたことがあり、一定の研究素地をもっていた。

(２)研究の背景
① サント・ニーニョ聖堂の研究としては、R. C. P. Tenazas: The Santo Niño of Cebu (Manila, 1965)が早いが、彫像制作地の調査は、R. Didier, “L’enfant Jésus présumé malinois de Cebu,” Handelingen van de Kon. Kring voor Oudheidkunde, Letterren en Kunst van Mechelen (Bulletin du Cercle archéologique, littéraire et artistique de Malines) LXXVII, 1973, 147-155 によってなされた。
②キリスト教の教義面から言えば、人間の属性をもつイエスが幼児期に単独で表わされることはなく、一定の年齢までマリアに育まれた。初期や中世初期の西欧に単独の幼児イエス像の例はなく、この種の彫像の最も早いものは、1340 年頃に初めて見られる。これは修道女などの個人的信仰の場で見られた幻視体験などに基づき形成されたと考えられ、図像学的、民俗学的、文化史的視点から論じたヨーロッパの単独幼児イエス像関係の文献はかなり出版されている。
③ヨーロッパ南北間の作品交流の問題は、いくつかの展覧会に伴う研究成果として公表されていて、たとえば、カナリア諸島におけるフランドル彫刻の受容を扱った Galante, Francisco. Galante Naranjo, Xiomara. Lumen Canariense (Tenerife： San Cristóbal de la laguna, 2003)に、セブのサント・ニーニョの記載がある。

２．研究の目的
(1)サント・ニーニョ（聖なる幼児イエス）像は、1519 年スペインを出航したマゼランの一行がもたらしたもので、彼の死後も同地に保存され、1564 年にレガスピの部隊によって発見されたという伝承をもつ。1571 年にはスペイン王フェリペ２世の認可で、サント・ニーニョに聖堂が献堂され現在に至っている。この彫像は、ベルギーの都市メッヘレンで制作されたことが知られており、この種の彫像は主に修道女やベギンと呼ばれる半俗修道女の個人的な信仰の場で用いられていたものである。しかしながら宗教改革を機に、聖母信仰が抑えられる一方で、単独の幼児イエス像は公的な場でも増加した。したがって、

マゼランの一行がそのような彫像をもっていたかという理由を具体的に問うことで、聖母に伴われない単独幼児像登場の、近代における意味の一端を探ることを目的とした。

(2)マゼランの一行と出会ったセブの首長ラジャ・フマボンとその妻は、出会ってから一週間も経たないうちに洗礼を受けて従者ともどもキリスト教に改宗した。このときの改宗者はおよそ800名を数えたと、伝えられる。このような電撃的洗礼の理由に、地元の宗教とキリスト教の信仰との間に類似点が多く、改宗を容易にしたということがあげられる。特に幼児イエスの彫像が大きな役割を果たしたと考えられるため、その実体を問うことで、近代の東西交流におけるセブのサント・ニーニョ像の意味を探ることを目的とした。

３．研究の方法

(1)現地調査

①フィリピンでの調査：申請者は 2010 年 1 月にサント・ニーニョ祭の調査を１回実施しているので、祝祭の時期ではなく第１回国際ビサイヤ芸術文化学会が行われた 2010 年 11 月に再調査をおこなった。セブのサント・ニーニョ聖堂のみならずマニラのアウグスティノ聖堂や博物館で資料を収集し、同時に科学的調査の申請し、現地研究者と連絡を取り合って実施計画をたてる。

　またアウグストゥス会関係者を通して、わが国にもレプリカがもたらされていることがわかり（長崎市二十六聖人記念聖堂所蔵）、仏陀降生図をはじめとするアジアにおける類似の像との関係など、研究当初に予定していなかったアジア交流史における位置づけの考察が必要となったので、京都工芸繊維大学工芸科学研究科並木誠士教授を共同研究者として加え、共同で現地調査をおこなう。

②ヨーロッパ、アメリカでの調査：ベルギーにおける輸出彫像の調査をおこない、スペイン、ポルトガルやイベロ・アメリカにみられる幼児イエス像を収集する。また、環太平洋地域に分布する神話にみられる単独の子供神の調査をおこなう。

(2)資料収集と分析：現地調査の過程で収集した文献資料を読み、問題を整理・分析して研究成果の公表をめざす。

４．研究成果

(1)アジアでの現地調査

①物性調査について：　2010 年度は、セブのサント・ニーニョ像の物性調査を中心にすすめた。11 月にフィリピンを訪問する際には現地研究協力者の仲介で可視光線や赤外線による写真撮影の許可が得られていたはずだったが、実際にはガラス越しのものしか認められなかった。また、2011 年 1 月のサント・ニーニョ祭における衣装替に際して、像の剥落した断片を採取し分析する予定だったが、これも最終的な許可が下りなかった。2011 年度には、現地の協力者を得ることができるよう連絡を続けたが、先方の都合により実施が延期されることになった。物性調査に関しては、使用されている木材の種類、表面の塗布の種類、回数、技法などの知見が得られれば、プラハのイエス像など関連する他の彫像との具体的な比較ができる点で重要であるが、さらに時間が必要である。

②物性調査以外：

子供神一般の広がりを調査するため、2010 年 7 月に訪問した北京において調査をおこなった。また、2010 年 11 月 17 日にセブ市で行われた第 1 回国際ビサイヤ芸術文化学会（ICOVAC）では、「十字路に立つ幼児イエス」のタイトルで発表を行い、本研究における物

性調査の重要性を訴え、参加者の間では理解が得られた。また従来にも増して、現地研究者と連絡がとれることになった。

(2)欧米での現地調査

①ベルギー：ベルギー文化財研究所（KIK/IRPA）が収集している同国内の幼児イエス像について、できるだけ資料を収集した。また、聖フランチェスコに起源があるとされる幼児イエスに対する信仰奨励の資料と、関連する図像を収集した。こうした文献調査はかなり進んだが、輸出彫像に関するものは比較的少なく、スペインやポルトガルにおける調査がさらに必要である。

②メキシコ：フィリピンはメキシコ副王領との関係が強かったので、16 世紀に起源のある単独の幼児イエス像を収集した。また、その一部はわが国のキリスト教美術とも関連があるので、関連の可能性を探った。

③ハワイ：環太平洋地域の神話世界の調査のために、ハワイ大学およびビショップ博物館での資料収集をおこなった。

(3)研究発表

①口頭発表

第１回国際ビサイヤ芸術文化学会において、文化財における物性調査の重要性を訴え、研究者の間で理解者が増えてきたことは、今後の研究を展開する上での基礎作りとしての意義を有する。

②論文発表

代表者は、いくつかの図書における分担執筆において、東西交流に関係するイメージ、近世初頭のキリスト教図像の問題、わが国のキリスト教美術の問題を扱うと共に、本研究の課題を発展させる目的で『「子供神」考にむけて』をまとめた。

共同研究者である京都工芸繊維大学工芸科学研究科並木誠士教授は、アジアとの交流の問題、子供像の問題にも注目した研究発表をおこなった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

①並木誠士、「八雲本陣蔵《源平合戦図屏風》について」、『美術フォーラム 21』、査読有、24 号、2011 年、4-11 ページ。

②並木誠士、「韃靼人図の源流を求めて-九博本を手がかりに」、『デザイン理論』（意匠学会編）、査読有、58 号、2011 年、65-74 ページ。

③並木誠士、「田中本家蔵花鳥図屏風について」、『美術フォーラム 21』、査読有、23 号、2010 年、6-13 ページ。

〔学会発表〕（計 3　件）

①蜷川順子、「十字路に立つ幼児イエス」、第１回国際ビサイヤ芸術文化学会（ICOVAC）、2010 年 11 月 17 日、セブ市ホール（フィリピン）。

②蜷川順子、「ヨーロッパ人が描いたアジアの諸都市」、第１０回欧州連合都市歴史学会（EAUH2010）、2010 年 9 月 2 日、ヘント大学（ベルギー）。

③蜷川順子、「像に触れる―１６世紀初頭のフランドル写本挿絵におけるケース・スタディ」、第１８回国際美学会（ICA）、2010年8月12日、北京大学（中国）。

〔図書〕（計 6　件）

①蜷川順子、関西大学出版部、『顔をみること―表わされた顔をめぐる美術史・文化史的断章』、2012 年、121-157 ページ。

②蜷川順子、関西大学出版部、『EU と日本学～「あかねさす」国際交流』、2012 年、175-200 ページ。

③蜷川順子、関西大学出版部、『アジアにおける文化システムの展開と交流』、2012 年、209-229 ページ。

④蜷川順子、関西大学出版部、『関西大学東西学術研究所創立 60 周年記念論文集』、2011 年、187-203 ページ。

⑤蜷川順子、ありな書房、『人のイメージ：共存のシュミラークル（初期ネーデルラント美術にみる〈個と宇宙〉Ⅰ）』、2011 年、7-36 ページ。

⑥蜷川順子（共監修）、関西大学出版部、『アジアが結ぶ東西世界』、2010 年、449 ページ。

６．研究組織

(1)研究代表者

蜷川　順子（NINAGAWA JUNKO）

関西大学・文学部・教授

研究者番号：00268468

(2)研究分担者

並木　誠士（NAMIKI SEISHI）

京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・教授

研究者番号：50211446

(3)研究協力者

ノーマ・レスピシオ（NORMA A. RESPICIO）

フィリピン大学・芸術文学部・教授